

アバール語における場所格交替動詞について*

山田 久 就

1. はじめに

ある事態をある動詞を用いて表現する場合、その事態への複数の関与者を名詞の格、名詞に伴う前置詞／後置詞、名詞と動詞の一致、名詞と動詞の語順など（以下、まとめて形態統語的標示と呼ぶ）を用いることによって区別して表現することができる。どの関与者をどの形態統語的標示で表現するかで、特に、どの関与者をOにするかで複数のパターンを持っている動詞がある¹。このような動詞の代表格は場所格交替動詞 (locative alternation verb)

* 本研究において標準アバール語のインフォーマントになっていただいた方々に感謝の意を申し上げたい。当然のことながら、例文の文法性、容認性に関する最終的な判断は筆者によるものであるし、記述内容に誤りがあった場合の責任は筆者にある。標準アバール語の文語で用いられている文字はキリル文字であるが、ラテン文字へ次のような転写を行って、標準アバール語を表記している。a=a, б=b, в=w, г=g, гь=g'', гь=g', гI=g^, д=d, e=e, ж=zh, з=z, и=i, й=j, к=k, къ=k'', къ=k', кI=k^, л=l, ль=l'', м=m, н=n, о=o, п=p, р=r, с=s, т=t, тI=t^, у=u, ф=f, х=x, хь=x'', хь=x', хI=x^, ц=ts, цI=ts^, ч=ch, чI=ch^, ш=sh, ш=shsh, э=è, ю=ju, я=ja。アバール語で使われているキリル文字のラテン文字への転写には標準的な方法が確立しておらず、ここでの転写法は筆者独自のものであることをお断りしておく。本稿で用いる省略記号は次の通りである。ABL：奪格, ABS：絶対格, ACC：対格, ALL：向格, AM：一致標識, ERG：能格, GEN：属格, INS：具格, LOC：位格, NOM：主格, PL：複数。位格, 向格, 奪格の後に書かれている数字1, 2, 3, 4, 5はそれぞれ第一系列, 第二系列, 第三系列, 第四系列, 第五系列を示す。本稿は文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(C)), 研究課題:『現地調査とデータベース作成によるアバール語の格配列と他動性に関する総合的研究』, 課題番号:20520366, 研究代表者:山田久就, 研究期間:2008-2010年度)から助成を受けている研究の成果の一部である。

¹ 本稿では、S, A, Oという用語を用いる。これらの用語は類型論的あるいは通

と呼ばれる一群の動詞である。場所格交替動詞は下位分類することができるが、その中でも英語の *spray* や *load* に代表される *spray/load* 動詞と呼ばれる一群の動詞が最もよく議論されている。*spray/load* 動詞とは、単純に言うところ、ある側面から見るとある対象物のある場所への移動を引き起こすことを表していると思なすことができ、別の側面から見るとある対象物の移動先にあたるあるものをなんらかの形で変化させること、あるいは、それに対して変化を伴わない働きかけを行うことを表していると思なせるような動詞である。(1)は英語の *spray* における項に対する形態統語的標示の二つのパターンを示している。(1a)と(1b)ではペンキと壁がそれぞれ違った形態統語的標示で表現されている。(1a)はペンキがOに選ばれ、壁は場所を示す前置詞 *on* を伴っていて、ペンキが壁の上に移動したことを表現していると思なすことができる。(1b)では壁がOに選ばれ、ペンキが一般的に道具を表現する時に使われる前置詞 *with* を伴っていて、壁の変化を表現していると思なすことができる。

- (1) a. Jack sprayed paint on the wall.
 b. Jack sprayed the wall with paint.
 (Levin 1993: 51)

spray/load 動詞はある対象物のある場所への移動を表現しているが、それと

言語的研究等でなじみの用語であるが、S, A, Oはそれぞれ自動詞の主語、他動詞の主語、他動詞の直接目的語と呼ばれることもある。本稿では主格・対格型の格配列と絶対格・能格型の格配列の両方を主語という用語を用いずに扱うことができるので、S, A, Oという用語を用いることにする。S, A, Oという用語の使い方には揺れがあるが、本稿では、Sを絶対格・能格型の格配列では絶対格、主格・対格型の格配列では主格に限定し、Aを絶対格・能格型の格配列では能格、主格・対格型の格配列では主格に限定し、Oを絶対格・能格型の格配列では絶対格、主格・対格型の格配列では対格に限定して用いる。したがって、この枠組みでは与格のOなどは存在しない。これは本稿の説明に誤解を与えないための便宜的なものであり、理論的な意味はない。

は反対に、ある対象物のある場所からの移動を表現している動詞で場所格交替動詞に含まれる動詞もあり、Levin (1993) が clear 動詞, wipe 動詞と呼んでいる動詞がこれに当たる。(2)では英語の clear 動詞の代表である clear が、(3)では英語の wipe 動詞の代表である wipe が使われている。(2a)では皿のテーブルからの移動、(3a)では指紋の壁からの移動を表している。(2b)ではテーブルの変化が表現されている。(3b)では壁の変化は必須要素ではないと考えられるので壁への働きかけが表されている。clear 動詞と wipe 動詞の違いは clear 動詞が(2b)のように移動元をOとした場合に移動対象を表現することができるのに対して、wipe 動詞ではそれができないことである。(3b)にはどのような前置詞を伴っても移動対象を加えることはできない。

- (2) a. Henry cleared dishes from the table.
 b. Henry cleared the table of dishes.
 (Levin 1993: 52)
- (3) a. Helen wiped the fingerprints off the wall.
 b. Helen wiped the wall (*of the fingerprints).
 (Levin 1993: 53)

本稿の目的は、アバール語ではどのような動詞が spray/load 動詞, clear 動詞, wipe 動詞として振る舞うのかについて明らかにすることである。アバール語は北東コーカサス諸語（ダゲスタン諸語とも呼ばれる）に属し、主にロシア連邦ダゲスタン共和国ならびに旧ソ連からの独立国であるアゼルバイジャン共和国で話されている。アバール語は山岳地帯で話されていることもあり、方言差が大きい。本稿でのアバール語は標準アバール語を意味することとする。アバール語は絶対格・能格型の格配列を持っている²。(4), (5)は

² 標準アバール語では全ての名詞および代名詞が絶対格・能格型であるが、方言では、中立型になる代名詞（Aに本来は絶対格の形式で現れる）を持っている方言

それぞれアバール語の一項自動詞と二項他動詞の例である。(4)では一項自動詞の唯一の項が絶対格で現れていて、(5)では二項他動詞の二つの項のうちで動作主が能格、動作の対象が絶対格で現れている。

- (4) G`isa xwana.
 Isa. ABS 死んだ
 「Isa が死んだ。」
- (5) Musatsa G`isa ch`wana.
 Musa. ERG Isa. ABS 殺した
 「Musa が Isa を殺した。」

アバール語には絶対格、能格の他に与格、属格とそれぞれ5系列からなる位格、向格、奪格、経路格がある。位格、向格、奪格、経路格の第一系列から第五系列の基本的な意味はそれぞれ「～の表面」、「～(人間など)の所」、「～(液状および固形状の物質など)の中」、「～の下」、「～(中に空間のある物など)の中」である。

アバール語の一部の動詞(本稿で出てくる動詞では、AM-axine「塗る」など)が一致標識を持っている。一致標識は絶対格名詞(自動詞のS、他動詞のOなど)の性および数を示し、人間の男性を表す名詞/代名詞の単数形(w-),人間の女性を表す名詞/代名詞の単数形(j-),人間以外を表す名詞/代名詞の単数形(b-),全ての名詞/代名詞の複数形(r-)の四つからなる。

以下では、2節でアバール語の spray/load 動詞について、3節で clear 動詞および wipe 動詞について述べていく。

や中立型になる代名詞とともに主格・対格型の代名詞(Sに本来は能格の形式で現れる)を持っている方言がある。

2. spray/load 動詞とその周辺

spray/load 動詞とは、上で述べたように、ある側面から見るとある対象物がある場所に移動させることを表していると思えることができ、一つのパターンでは移動対象をOに選び、別のパターンでは対象物が移動していく場所（以下、移動先と呼ぶ）をOに選ぶことができる動詞である。上で示した英語の spray の例である(1)を(6)として再び示す。(6a)では移動対象がOになっていて、(6b)では移動先がOになっている。

- (6) a. Jack sprayed paint on the wall.
 b. Jack sprayed the wall with paint.
 (Levin 1993: 51)

英語の spray/load 動詞に関しては、Partee (1965/1979), Fillmore (1968/2003), Fraser (1971), Anderson (1971), Dowty (1991), Levin (1993)をはじめ、多くの文献で議論されている³。Levin(1993: 118)は英語の spray/load 動詞として(7)の動詞をあげている。?は原文に付けられている。

- (7) brush, cram, crowd, cultivate, dab, daub, drape, drizzle, dust, hang, inject, jam, load, mound, pack, pile, plant, plaster, ?prick, pump, rub, scatter, seed, settle, sew, shower, slather, smear, smudge, sow, splatter, splash, splatter, spray, spread, sprinkle, spritz, squirt, stack, stick, stock, strew, string, stuff, swab, ?vest, ?wash, wrap

³ Levin (1993: 117) に spray/load 動詞に関する文献が広範にあげられている。また、Levin & Rappaport Hovav (2005) には spray/load 動詞のいろいろな分析について詳しく述べられている。

英語では、移動先がOになる場合、移動対象は前置詞 with を伴って現れる。これは、(8)のように、一般的に道具を表す時の表現と同じである。

(8) John broke the vase with the hammer.

どの程度の言語でそうであるかはわからないが、多くの言語で、移動先がOになる場合の移動対象の表現方法は一般に道具を表す時の表現方法と同じになるようである。たとえば、(9)は日本語の spray/load 動詞‘塗る’の例であり、(10)はロシア語の spray/load 動詞 namazat’ 「塗る」の例である。それぞれの a で移動対象がOになっていて、b で移動先がOになっている。また、(11)と(12)が日本語とロシア語の道具を表す名詞を含んだ文である。日本語では、道具は一般的に‘で’で表現されるし、spray/load 動詞で移動先がOになる場合の移動対象も‘で’で表現され、同じである。ロシア語の場合も、道具は一般的に具格で表現されるし、spray/load 動詞で移動先がOになる場合の移動対象も具格で表現され、同じである⁴。

(9) a. 太郎がペンキを壁に塗った。

b. 太郎が壁をペンキで塗った。

(10) a. Ivan namazal maslo na xleb.

Ivan.NOM 塗った バター.ACC 上に<前置詞> パン.ACC

「Ivan がパンにバターを塗った。」

b. Ivan namazal xleb maslom.

Ivan.NOM 塗った パン.ACC バター.INS

「Ivan がパンをバターで塗った。」

(11) 太郎が花瓶を金槌で割った。

⁴ ここでいう具格は日本語でのロシア語文法では一般に造格と呼ばれている。

(12) Ivan razbil vazu molotkom.

Ivan. NOM 割った 花瓶. ACC 金槌. INS

「Ivan が花瓶を金槌で割った。」

アバール語へと話を移す。アバール語の動詞の格配列に対してかなり網羅的に調査を行ったが、アバール語には spray/load 動詞はほとんど存在しない。しかし、AM-ox'ize 「塗る」、zhuzhaze 「塗る」は spray/load 動詞である。英語では「塗る」ということを表すのにいろいろな動詞が使われるが、アバール語で「塗る」ことを表すにはほとんどの場合 AM-axine 「塗る」が用いられる。その他に、AM-ox'ize 「塗る」や zhuzhaze 「塗る」がある。AM-ox'ize 「塗る」は家を作ったり、修理したりするときには家や壁などの家の一部に何か（粘土、塗料など）を塗る場合に主に使われる。zhuzhaze 「塗る」は塗る範囲が少し広いというようなニュアンスを持っている。AM-axine 「塗る」は私が調べたテキストでとても多く使用されているのに対して、AM-ox'ize 「塗る」および zhuzhaze 「塗る」のテキストでの使用頻度はほとんどない。AM-axine 「塗る」では、(13a) のように移動する対象が必ず O になり、移動先は位格（主に第一位格）で表される。(13b) のように移動先を O にすることはできない。それに対して、AM-ox'ize 「塗る」は二つのパターンを持っている。(14a) では移動する対象が O になって、移動先が第一位格になっているのに対して、(14b) では移動先が O になっていて、移動する対象が能格で示されている。二つのパターンが可能であるが、(14a) のように移動対象が O になっていることが圧倒的に多く、一般的である。zhuzhaze 「塗る」も AM-ox'ize 「塗る」と同様である。

(13) a. Musatsa lazhbar k"eda baxana.

Musa. ERG 塗料. ABS 壁. LOC1 塗った

「Musa が塗料を壁に塗った。」

- b. *Musatsa lazhbaral" k"ed baxana.
 Musa. ERG 塗料. ERG 壁. ABS 塗った
 「Musa が塗料で壁を塗った。」
- (14) a. Musatsa lazhbar k"eda box'ana.
 Musa. ERG 塗料. ABS 壁. LOC1 塗った
 「Musa が塗料を壁に塗った。」
- b. Musatsa lazhbaral" k"ed box'ana.
 Musa. ERG 塗料. ERG 壁. ABS 塗った
 「Musa が塗料で壁を塗った。」

アバール語では(15)のように道具を表現するのに能格が一般的に使われる。したがって、アバール語でも移動先がOになる場合の移動対象の表現方法は、道具を表す時の表現方法と同じである。

- (15) Musatsa gamach^h kwart'itsa bekana.
 Musa. ERG 石. ABS 金槌. ERG 割った
 「Musa が石を金槌で割った。」

壁などにペンキなどで「色を塗る」ことを表現する場合、アバール語では、AM-axine「塗る」よりも AM-el"ine「色を付ける」がよく用いられる。英語で言えば、color に当たる。「色を付ける」のであるから、(16)のように、この動詞ではペンキなどが塗られる場所をOにして、ペンキなどの塗られるものは能格で表す。塗られるものをOにすることはできない。

- (16) Musatsa lazhbaral" k"ed bel"ana.
 Musa. ERG 塗料. ERG 壁. ABS 色を付けた
 「Musa が塗料で壁に色を付けた。」

英語の spray に意味が近い動詞は punx"ize 「噴霧する, スプレーする」である。(17a)のように移動対象すなわち噴霧される物(普通は液体)をOにして, 移動先を向格で表現することはできるが, (17b)のように移動先をOにすることはできない。

- (17) a. Musatsa lazhar k"ede punx"ana.
 Musa.ERG 塗料.ABS 壁.ALL1 噴霧した
 「Musa が塗料を壁に噴霧した。」
- b. *Musatsa lazharal" k"ed punx"ana.
 Musa.ERG 塗料.ERG 壁.ABS 噴霧した
 「Musa が塗料を壁に噴霧した。」

また, 英語の load のように「～を～に運び込む」というようなことを表現したい場合には, l"eze 「置く」を使う。この動詞はあるものをある場所に置くことを表す最も一般的な動詞であり, (18)のように移動対象をOにして, 移動先を位格(主に第一位格)で表すことはできるが, 移動先をOにすることはできない。

- (18) Musatsa mashinajalda juk l"una.
 Musa.ERG 車.LOC1 荷物.ABS 置いた
 「Musa が車に荷物を置いた。」

l"eze 「置く」のように移動対象をOにして, 移動先を位格で表すことだけができる動詞には, tsu(j)ze 「くっつける, 隣接させる」, ch"waze 「付ける」, sedeze 「接着剤でくっつける」, AM-ux'ine 「結ぶ」, ret'ine 「着せる, 着る」, AM-ug'ize 「突っ込む」, AM-ig"ize 「つるす」, AM-aze 「つける, つるす」, chchu(j)ze 「浸す, (液体の中に) 入れる」, xxeze 「通す」, rech"ch'ize 「当てる, 撃つ」がある。また, rexize 「投げる」, t'eze 「そそぐ, つぐ」, chwalxize

「(水を) はねかける」, k'wag'ize 「撃つ」は punx"ize 「噴霧する, スプレーする」のように移動対象をOにして, 移動先を向格で表すことだけができる。

一方, xulize 「すすぐ, そそぐ」は移動対象が水などの液体となるが, (19)のように移動先をOにして, 移動対象を能格で表現することはできるが, 移動対象をOにすることはできない。

- (19) Musatsa bats'ts^adab l'etsa kweral xulana.
 Musa.ERG きれいな 水.ERG 手.PL.ABS すすいだ
 「Musa がきれいな水で手をすすいだ。」

「詰める」や「満たす」を表す動詞はどうだろうか。英語では, cram など「詰める, 詰め込む」を意味する動詞がたくさんあり, 二つのパターンを取るが, 「満たす」を意味する fill は移動先すなわち満たされる場所が必ずOになる。アバール語には「詰める」や「満たす」を表す動詞は ts^eze しかない。以下では, 「満たす」と注釈することにする。ts^eze 「満たす」は(20a)のように移動先すなわち満たされる場所が必ずOとなる。この場合, 移動対象は属格で表される。(20b)のように移動対象すなわち満たされるものをOにすることはできない。

- (20) a. Musatsa g^eret^ l'el ts^una.
 Musa.ERG 水入れ.ABS 水.GEN 満たした
 「Musa が水入れを水で満たした。」
 b. *Musatsa g^ert'inib l'im ts^una.
 Musa.ERG 水入れ.LOC5 水.ABS 満たした
 「Musa が水入れに水を満たした。」

zhemize 「巻く, くるむ」ではハンカチなどの巻くものをOにして, 巻かれるものを位格(主に第一位格)で表すことができる。(21a)がその例である。

また、巻かれるものをOにすることもできる。この場合、ハンカチなどの巻かれるものは(21b)のように第三位格で表現される。インフォーマントによると(21c)のように能格にすることも可能であるようだが、私が調べたテキストには使用例はなかった。

- (21) a. Musatsa kwerbats^{ts} g^eechalda zhemana.
 Musa. ERG ハンカチ. ABS リンゴ. LOC1 くるんだ
 「Musa がリンゴをハンカチでくるんだ。」
- b. Musatsa kwerbats^{ts}al^{ul} g^eech zhemana.
 Musa. ERG ハンカチ. LOC3 リンゴ. ABS くるんだ
 「Musa がリンゴをハンカチにくるんだ。」
- c. Musatsa kwerbats^{ts}al^{ul} g^eech zhemana.
 Musa. ERG ハンカチ. ERG リンゴ. ABS くるんだ
 「Musa がリンゴをハンカチでくるんだ。」

l^{ul}aze「こする」も二つのパターンを持っている。(22a)ではこすられる場所がOになり、こすりつけられるものである手が能格になっている。(22b)では、こすりつけられるものがOになり、こすられる場所が第一位格で表されている。Levin (1993) は英語の rub を spray/load 動詞に入れているので、l^{ul}aze「こする」も spray/load 動詞と見なすことができる。どのような動詞を spray/load 動詞と呼ぶかについて多くの研究者間に共通する厳格な定義があるわけではないように思われる。一般的な（あるいは、典型的な）spray/load 動詞はあるものがある場所に移動することを何らかの形で含意するのに対して、l^{ul}aze「こする」は最初からあるものがある場所にくっついていて、そこであるものを動かすことを意味するので、l^{ul}aze「こする」は一般的な spray/load 動詞とは意味的に違いがある。また、一般的な spray/load 動詞は移動先をOにした場合には、Oの何らかの変化を含意するが、この動詞ではOの変化は動詞の意味に含まれていないので、この点でもこの動

詞と一般的な spray/load 動詞には違いがある。

- (22) a. Musatsa kweraz k^hark'abi l"ul"ana.
 Musa.ERG 手.PL.ERG ほお.PL.ABS こすった
 「Musa が手でほおをこすった。」
- b. Musatsa kweral k^hark'abazda l"ul"ana.
 Musa.ERG 手.PL.ABS ほお.PL.LOC1 こすった
 「Musa が手をほおにこすりつけた。」

AM-asine「模様などをつける」も二つのパターンを取る動詞である。ただし、spray/load 動詞はすでに存在するものをある場所に移動することを意味するが、AM-asine はある場所に模様などを描きあげることの意味し、もともとは模様は存在しないので、AM-asine「模様などをつける」と一般的な spray/load 動詞には意味的に違いがあると思われる。この動詞を spray/load 動詞と呼ぶかどうかは spray/load 動詞の定義によることになる。(23a)では描かれる対象がOになっていて、描かれる場所は第一位格で表されていて、(23b)では、描かれる場所がOになっていて、描かれる対象は能格になっている。

- (23) a. Musatsa k"eda surtal rasana.
 Musa.ERG 壁.LOC1 絵.PL.ABS つけた
 「Musa が壁に絵をつけた。」
- b. Musatsa k"ed surtaz basana.
 Musa.ERG 壁.ABS 絵.PL.ERG つけた
 「Musa が壁に絵をつけた。」

以上がアバール語での spray/load 動詞とそれに類似する（あるいは含まれる可能性のある）動詞である。

3. clear 動詞と wipe 動詞

前節で扱った spray/load 動詞はある側面から見ると何かをどこかへ移動することを意味する動詞であるが、ここではその反対にある側面から見るとどこかにある何かをそこから移動することを意味する動詞を問題にする。そうした動詞の中に、移動対象をOにするパターンと移動元をOにするパターンを持った動詞がある。clear 動詞と wipe 動詞である。上で示した clear 動詞と wipe 動詞の例をそれぞれ(24)と(25)として示す。(24)では clear 動詞である clear が、(25)では wipe 動詞である wipe が使われている。clear の場合、(24a)では移動対象がOになっていて、移動元が前置詞 from を伴って表現されているのに対して、(24b)では移動元がOになっていて、移動対象が前置詞 of を伴って表現されている。一方、wipe はどうか。(25a)では移動対象がOになっていて、移動元が前置詞 off を伴って表現されている。(25b)では移動元がOになっている。この場合、移動対象を表現することはできない。clear や wipe のように二つのパターンを持っている動詞において、移動元がOになっている場合に移動対象を表すことができる動詞が clear 動詞であり、移動対象を表すことができない動詞が wipe 動詞である。

- (24) a. Henry cleared dishes from the table.
 b. Henry cleared the table of dishes.
 (Levin 1993: 52)
- (25) a. Helen wiped the fingerprints off the wall.
 b. Helen wiped the wall (*of the fingerprints).
 (Levin 1993: 53)

Levin (1993: 124-127) は英語の clear 動詞として(26)の動詞をあげていて、wipe 動詞として(27)および(28)の動詞をあげている。

- (26) clear, clean, drain, empty
- (27) bail, buff, dab, distill, dust, erase, expunge, flush, leach, lick, pluck, polish, prune, purge, rinse, rub, scour, scrape, scratch, scrub, shave, skim, smooth, soak, squeeze, strain, strip, suck, suction, swab, sweep, trim, wash, wear, weed, whisk, winnow, wipe, wring
- (28) brush, comb, file, filter, Hoover, hose, iron, mop, plow, rake, sandpaper, shear, shovel, siphon, sponge, towel, vacuum

英語には clear 動詞はとても少ないながらも存在するが、日本語には clear 動詞はないように思われる。アバール語ではどうであろうか。AM-ats^{ts}ine 「きれいにする」は移動対象と移動元を O にすることができる動詞である。移動対象としては、g^{et} 「汗」、mag^u 「涙」、bi 「血」、x^{ur} 「ほこり」などがよく使われる。(29a) は移動対象が O になっている例である。移動対象が O になっている場合、移動元は奪格（主に第一奪格）で表現することができる。(29b) は移動元が O になっている例である。移動元が O になっている場合、移動対象を第一奪格で表すことができる。ただし、私が調べたテキストにおいて移動対象が第一奪格で現れている例はほとんどない。英語の前置詞 of とアバール語の第一奪格の違いを無視すると AM-ats^{ts}ine 「きれいにする」は clear 動詞ということになる。私が調査したところでは、アバール語で clear 動詞と言えるのはこの動詞だけである。

- (29) a. Musatsa berazdasa mag^u bats^{ts}ana.
 Musa.ERG 目.PL.ABL1 涙.ABS きれいにした
 「Musa が目から涙を取り除いてきれいにした。」
- b. Musatsa magⁱidasa beral rats^{ts}ana.
 Musa.ERG 涙.ABL1 目.PL.ABS きれいにした
 「Musa が涙を取り除いて目をきれいにした。」

clear 動詞はアバール語に AM-ats^{ts}ine 「きれいにする」しか見あたらないが、wipe 動詞は以下に示すようにある程度の数がある。churize「洗う」は、AM-ats^{ts}ine「きれいにする」に意味的に近く、二つのパターンを持つ。churize「洗う」は(30b)のように移動元をOにしていることがほとんどで、(30a)のように移動対象がOになっていることはほとんどない。正確な数字ではないが、1%もないと思われる。churize「洗う」は AM-ats^{ts}ine「きれいにする」と違って、移動元がOになっている場合に移動対象を表すことができない。したがって、churize「洗う」は wipe 動詞ということになる。ちなみに、英語の wash も wipe 動詞である。

- (30) a. Musatsa bet^{er}aldasa rak' churana.
 Musa. ERG 頭. ABL1 土. ABS 洗った
 「Musa が頭から土を洗い落とした。」
- b. Musatsa bet^{er} churana.
 Musa. ERG 頭. ABS 洗った
 「Musa が頭を洗った。」

ch^{ex}eze 「出す、空にする」も二つのパターンを持っている。(31a)では、移動対象がOになっている。移動対象がOになっている場合、移動元は奪格(主に第一奪格)で表現することができる。(31b)では、移動元がOになっている。この場合、移動対象を表現することはできない。したがって、意味的に近い英語の empty とは違い、wipe 動詞ということになる。

- (31) a. Musatsa mashinajaldasa juk ch^{ex}'ana.
 Musa. ERG 車. ABL1 荷物. ABS 出した
 「Musa が車から荷物を出した。」

- b. Musatsa mashina ch'ex'ana.
 Musa.ERG 車.ABS 空にした
 「Musa が車を空にした。」

生えている毛などを取り除くことを表す k'k'waze「(毛を)剃る」, k''unts'ize「(毛などを)刈る, はさみで切る」, x'ulize「(毛を)抜く」も移動対象と移動元の両方をOにすることができる動詞である。k''unts'ize「(毛などを)刈る, はさみで切る」の例を(32)に示す。(32a)では移動対象がOになっていて,(32b)では移動元がOになっている。どの動詞でも, 移動元がOになっている場合に移動対象を表現することができない。

- (32) a. Musatsa bet'eraldasa ras k''unts'ana.
 Musa.ERG 頭.ABL1 毛.ABS 刈った
 「Musa が頭から毛を刈った。」
- b. Musatsa bet'er k''unts'ana.
 Musa.ERG 頭.ABS 刈った
 「Musa が頭を刈った。」

次に, 生えている植物などを取り除く動詞を問題にする。AM-etsize「刈る」, l'il'ize「刈る」, ch'araze「(雑草などを)抜く」も二つのパターンを持っている。AM-etsize「刈る」は xur「畑」などに生えている xer「草」を刈ることを表現することにほぼ使われる。比喩的に使われる場合もあるが, 取り除かれる対象はほぼ xer「草」に限定される。取り除かれる対象である xer「草」がOになることが多いが, 取り除かれる場所である xur「畑」などがOになることもある。l'il'ize「刈る」は xur「畑」などに育った rol''「小麦」などの穀物を収穫するために刈ることを表現するのに使われる。rol''「小麦」などの取り除かれる対象がOになることも, xur「畑」などの取り除かれる場所がOになることもある。ch'araze「(雑草などを)抜く」では, ch'ar「雑草」

などの移動対象がOになることも、xur「畑」などの移動元がOになることもある。どの動詞でも、移動元がOになっている場合には、移動対象を表現することはできない。(33)は l'il'ize「刈る」の例である。(33a)では移動対象が、(33b)では移動元がOになっている。(33a)では移動元である xur「畑」が第五奪格で現れている。どの動詞でも、移動対象がOである場合、(33a)のように xur「畑」などの移動元を奪格で表すことができるが、xur「畑」などは移動元としてではなく、作業が行われている場所として、位格で現れることが多い。

- (33) a. Musatsa xurisa rol' l'il'ana.
 Musa. ERG 畑. ABL5 小麦. ABS 刈った
 「Musa が畑から小麦を刈った。」
- b. Musatsa xur l'il'ana.
 Musa. ERG 畑. ABS 刈った
 「Musa が畑を刈った。」

「抜く」という意味を表すのには、いろいろな物に対して、AM-et'ize「抜く」がよく使われる。AM-et'izeは「草を抜く」、「毛を抜く」、「果物をもぐ」ことなどを表現するのに広く使われる。育ったものを取り除くことを意味すると考えられる。この動詞では、Oになるのは必ず移動対象であって、移動元がOになることはない。

chchuk'ize「(動物の皮を)はぐ、(人間や動物の体に付けている物を)はずす」は、移動元が動物で移動対象が皮などであるような場合、二つのパターンで使われる。t'om「動物の皮」、t'ex'「羊の毛皮」、ts'oko「羊以外の毛皮」などの移動対象をOにすることができる。この場合、ots「雄牛」などの動物を表す名詞を移動元として奪格(ほぼ第一奪格)で表すことができるが、(34a)のように、ots「雄牛」の属格でt'om「動物の皮」を修飾して「雄牛の皮をはぐ」と表現するのが普通である。また、(34b)のように、ots「雄牛」などの

動物を表す名詞を移動元としてOにすることができる。この場合には、移動対象を表現することはできない。

(34) a. Musatsa otsol tʰom chchukʰana.

Musa.ERG 雄牛.GEN 皮.ABS はいだ

「Musa が雄牛の皮をはいだ。」

b. Musatsa ots chchukʰana.

Musa.ERG 雄牛.ABS はいだ

「Musa が雄牛の皮をはいだ。」

「むく」ことを表す場合には、AM-axʰize「はずす、抜く、脱がす、脱ぐ」がよく使われる。AM-axʰize「はずす、抜く、脱がす、脱ぐ」はある場所(生物も含む)から何かを離すことを広く表す動詞である。この動詞は必ず移動対象をOにする。移動元をOにすることはできない。すでに述べた動詞の他で、移動対象をOにすることはできるが、移動元をOにすることができない動詞には、AM-ikʰize「盗む」、xachaze「はぎ取る」、xʰwagʰaze「はぎ取る」、xʰashstʰize「掻き除く、はぎ取る」などがある。

4. 終わりに

本稿では、アバール語でどのような動詞が spray/load 動詞, clear 動詞, wipe 動詞になるのかについて述べた。spray/load 動詞およびそれに含まれる可能性のある類似の動詞には、AM-oxʰize「塗る」、zhuzhaze「塗る」、zhemize「巻く、くるむ」、lʰulʰaze「こする」、AM-asine「模様などをつける」がある。clear 動詞は AM-atsʰtsʰine「きれいにする」だけである。wipe 動詞には、churize「洗う」、chʰexʰeze「出す、空にする」、kʰkʰwaze「(毛を) 剃る」、kʰuntsʰize「(毛などを) 刈る、はさみで切る」、xʰulize「(毛を) 抜く」、AM-etsize「刈る」、lʰilʰize「刈る」、chʰaraze「(雑草などを) 抜く」、chchukʰize「(動物

の皮を)はぐ、(人間や動物の体に付けている物を)はずす」がある。今のところ明らかなのは以上の動詞であるが、さらにこのような動詞が多少ある可能性はもちろんあるだろう。

参考文献

- Anderson, Stephen R. (1971) "On the Role of Deep Structure in Semantic Interpretation," *Foundations of Language* 7: 387-396.
- Dowty, David (1991) "Thematic Proto-roles and Argument Selection," *Language* 67: 547-619.
- Fillmore, Charles J. (2003) "Case for Case," in Charles J. Fillmore, *Form and Meaning in Language: Papers on Semantic Roles*, 23-122, Sandford: CSLI. (Originally in Emmon Bach and Robert T. Harms (eds.), *Universals in Linguistic Theory*, 1-88, New York: Holt, Rinehart and Winston, 1968)
- Fraser, Bruce (1971) "A Note on the Spray Paint Cases," *Linguistic Inquiry* 2: 604-607.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternation: Preliminary Investigation*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (2005) *Argument Realization*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Partee, Barbara Hall (1979) *Subject and Object*, New York: Garland. (Originally, Doctoral Dissertation, MIT, Cambridge, MA, 1965)